

高知大学学位授与記録

本学は、次の者に博士（医学）の学位を授与したので、学位規則（昭和28年文部省令第9号）第8条の規定に基づき、その論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を公表する。

目 次

学位記番号	氏名	学位論文の題目	ページ
甲総医博第166号	永野 志歩	Predictors of probable attention deficit hyperactivity disorder in elderly patients with mild cognitive impairment visiting a memory clinic （もの忘れ外来を受診した軽度認知障害高齢者における注 意欠如・多動症の可能性の予測因子）	1

氏 名（本籍）	永野 志歩（高知県）
学 位 の 種 類	博士（医学）
学 位 記 番 号	甲総医博第166号
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位授与年月日	令和6年12月17日
学位論文題目	Predictors of probable attention deficit hyperactivity disorder in elderly patients with mild cognitive impairment visiting a memory clinic （もの忘れ外来を受診した軽度認知障害高齢者における注意欠如・多動症の可能性の予測因子）
発 表 誌 名	Psychiatry and Clinical Neurosciences Reports. 2023; 2(2): DOI:10.1002/pcn5.104 2023年5月25日
審査委員 主査 教授 藤田 博一 副査 教授 北岡 裕章 副査 教授 松下 拓也	

論文の内容の要旨

論文審査の結果の要旨

学 位 論 文 要 旨

	氏 名	永野 志歩
論 文 題 目	Predictors of probable attention deficit hyperactivity disorder in elderly patients with mild cognitive impairment visiting a memory clinic (もの忘れ外来を受診した軽度認知障害高齢者における注意欠如・多動症の可能性の予測因子)	
(論文要旨)		
目的(Abstract): 軽度認知障害(MCI)は、記憶力は低下しているが日常生活は自立しており、アルツハイマー病(AD)の前駆段階を高頻度を含む状態として AD の早期診断の観点から重視されている。MCI には AD 以外のさまざまな原因が含まれることも考えられ、MCI の原因を特定し、AD の初期段階にある MCI とその他の MCI を区別することが重要である。一方、注意欠如・多動症(ADHD)は不注意・多動・衝動性を特徴とする生得的な神経発達症で、不注意によるもの忘れを認め、その兆候や症状は通常、幼児期から現れる。ADHD の特徴は青年期以降、高齢になっても持続することが指摘されているが、ADHD 患者がもの忘れ外来を受診した場合、日常生活に大きな支障を来さない程度のもの忘れがあるという点で MCI と診断される可能性がある。しかし MCI と診断された患者の中に、ADHD の可能性が高い(probable ADHD)患者がどの程度の割合で存在するのかについては明らかにされていない。そこで本研究では、MCI の定義を満たす患者の中の probable ADHD 患者の割合を推定し、更に ADHD の可能性が高い MCI 患者を同定するための因子について検討した。		
方法(Methods): 高知大学医学部附属病院もの忘れ外来を受診した MCI の基準を満たす 50 歳以上の患者 36 名(男性 11 名、女性 25 名、平均年齢 72.4±7.6 歳)を対象とした。そして MCI 患者を、Wender Utah Rating Scale (WURS)の得点により、高得点群すなわち probable ADHD 群[MCI/ADHD(+)]と低得点群すなわち ADHD の可能性が低い群[MCI/ADHD(-)]に分類した。WURS のカットオフ値については、30 点、36 点、46 点が研究されているが、今回の対象者は高齢層である点、ADHD 患者は自身の困難さを過小評価する可能性がある点を考慮し、スウェーデンの成人精神科外来患者における ADHD の有病率調査研究で用いられたカットオフ値と同様の 30 点を採用した。そのうえで、小児期および現在における不注意あるいは多動・衝動性の特徴、自閉スペクトラム症の特徴、推定知能指数、人口統計学的データを 2 群間で比較した。また probable ADHD 群を予測する因子を同定するために多重ロジスティック回帰分析を行った。		
結果(Results): MCI/ADHD(+群)は 9 人(25.0%)、MCI/ADHD(-群)は 27 人であった。男性患者 11 人のうち 6 人が MCI/ADHD(+群)と分類されたのに対し、女性患者 25 人のうち同カテゴリーに分類されたのは 3 人だった。MCI/ADHD(+群)は、ほとんどが男性で、受診時年齢が比較的若く、学校教育年数が長く、自閉スペクトラム症の傾向が強い患者であった。多重ロジスティック回帰分析により、男性であることと、現在の多動・衝動性が高いことが MCI 患者における ADHD の可能性の有意な予測因子となることが示された。		
結論(Conclusions): 本研究では MCI 患者の 4 分の 1 が probable ADHD であった。そして男性、MCI 診断時の多動・衝動性が高いことは、MCI 患者における probable ADHD を予測する上で役立つ可能性が示唆された。本研究の限界点としては、これらの結果は単一施設の小規模研究から得られたものであり、多数の症例を用いた縦断的研究が必要であると考えられる。また、本研究は横断的研究であり、両方のグループで追跡調査を行い、患者の長期的な臨床経過を観察し、ADHD のままである症例と認知症に進行した MCI 患者とを比較する必要がある。		

論文審査の結果の要旨

		氏 名	永野 志歩
審 査 委 員	主 査 氏 名	藤田 博一	
	副 査 氏 名	北岡 裕章	
	副 査 氏 名	松下 拓也	

題 目 Predictors of probable attention deficit hyperactivity disorder in elderly patients with mild cognitive impairment visiting a memory clinic
(もの忘れ外来を受診した軽度認知障害高齢者における注意欠如・多動症の可能性の予測因子)

著 者 Shiho Nagano, Naoto Kamimura, Satoko Sota, Hidetoshi Takahashi, Narufumi Suganuma, Hiroaki Kazui

発表誌名、巻(号)、ページ(～)、 年 月
Psychiatry and Clinical Neurosciences Reports. 2023; 2(2): DOI:10.1002/pcn5.104
2023年5月25日

要 旨

【背景・目的】

軽度認知障害(MCI)は、記憶力は低下しているが日常生活は自立しており、アルツハイマー病(AD)の前駆段階を高頻度を含む状態としてADの早期診断の観点から重視されている。MCIにはAD以外のさまざまな原因が含まれることも考えられ、MCIの原因を特定し、ADの初期段階にあるMCIとその他のMCIを区別することが重要である。一方、注意欠如・多動症(ADHD)は不注意・多動・衝動性を特徴とする生得的な神経発達症で、不注意によるもの忘れを認め、その兆候や症状は通常、幼児期から現れる。ADHDの特徴は青年期以降、高齢になっても持続することが指摘されているが、ADHD患者がもの忘れ外来を受診した場合、日常生活に大きな支障を来さない程度のもの忘れがあるという点でMCIと診断される可能性がある。しかしMCIと診断された患者の中に、ADHDの可能性が高い(probable ADHD)患者がどの程度の割合で存在するのかについては明らかにされていない。そこで本研究では、MCIの定義を満たす患者の中のprobable ADHD患者の割合を推定し、更にADHDの可能性が高いMCI患者を同定するための因子について検討した。

【方法】

高知大学医学部附属病院もの忘れ外来を受診したMCIの基準を満たす50歳以上の患者36名（男性11名、女性25名、平均年齢 72.4 ± 7.6 歳）を対象とした。そしてMCI患者を、Wender Utah Rating Scale (WURS) の得点により、高得点群すなわちprobable ADHD群[MCI/ADHD(+)]と低得点群すなわちADHDの可能性が低い群[MCI/ADHD(-)]に分類した。WURSのカットオフ値については、30点、36点、46点が研究されているが、今回の対象者は高齢層である点、ADHD患者は自身の困難さを過小評価する可能性がある点を考慮し、スウェーデンの成人精神科外来患者におけるADHDの有病率調査研究で用いられたカットオフ値と同様の30点を採用した。そのうえで、小児期および現在における不注意あるいは多動・衝動性の特徴、自閉スペクトラム症の特徴、推定知能指数、人口統計学的データを2群間で比較した。またprobable ADHD群を予測する因子を同定するために多重ロジスティック回帰分析を行った。

【結果・考察】

MCI/ADHD(+)群は9人（25.0%）、MCI/ADHD(-)群は27人であった。男性患者11人のうち6人がMCI/ADHD(+)と分類されたのに対し、女性患者25人のうち同カテゴリーに分類されたのは3人だった。MCI/ADHD(+)群は、ほとんどが男性で、受診時年齢が比較的若く、学校教育年数が長く、自閉スペクトラム症の傾向が強い患者であった。多重ロジスティック回帰分析により、男性であることと、現在の多動・衝動性が高いことがMCI患者におけるADHDの可能性の有意な予測因子となることが示された。

本研究ではMCI患者の4分の1がprobable ADHDであった。そして男性、MCI診断時の多動・衝動性が高いことは、MCI患者におけるprobable ADHDを予測する上で役立つ可能性が示唆された。

本研究の限界点としては、これらの結果は単一施設の小規模研究から得られたものであり、多数の症例を用いた縦断的研究が必要であると考ええる。また、本研究は横断的研究であり、両方のグループで追跡調査を行い、患者の長期的な臨床経過を観察し、ADHDのままである症例と認知症に進行したMCI患者とを比較する必要がある。

【結論】

以上のように、本論文は、軽度認知障害（MCI）患者における注意欠如・多動症（ADHD）の可能性を予測する因子を示した医学的に高い価値を有するものである。

よって、審査委員一同は本論文が高知大学博士（医学）に相応しい価値あるものと判断した。